

1 親子の居場所事業

目指す拠点の姿	(参考)3期目振り返りの課題	自己評価(A~D)	
		法人	区
①利用者を温かく迎え入れる雰囲気のある場になっている。	(事業評価当日からの課題) ・つながりたいという親のニーズをくみ取る工夫が必要。 ・仕事復帰後の利用など切れ目のない支援への対応 ・妊娠期の方、0歳児の利用促進	A	A
②多様な世代、性別等の養育者と子どもが訪れる場になっている。	(振り返りシート・意見交換からの課題) ・子ども同士が関わり合えるよう環境整備を行い、養育者にも子ども同士の関わり合い(けんかも含め)の大切さを伝え、ひろば以外でも養育者が実践できるよう、発達に応じた関わり方について理解できるように伝えていく必要がある。 ・子ども同士関わり合えるツール(おもちゃ等)、利用者がリラックスできる設備や環境については、今後も工夫していく。	B	B
③養育者と子どものニーズ把握の場になっている。	・アクセスが不便な利用者に対し、関係機関と協力して、今後も外遊びなどの企画を実践していく。 ・外国籍の親子に対する支援について検討が必要	A	A
④親(養育者)自身が親として育ち、また子どもが育つ場となっている。		A	A

評価の理由(法人)

(主なデータ)

内訳	R1	R2	R3	R4
0歳児	4,144	1,593	2,535	3,654
1歳児	4,017	1,850	2,526	3,045
2歳児	2,361	774	801	1,370
3歳児	1,044	466	481	494
4歳児	508	61	134	186
5歳児~	276	92	63	152
養育者	11,455	4,544	6,462	9,006
総数	23,805	9,380	13,002	17,907

R1	R2	R3	R4
978	500	653	886

R1	R2	R3	R4
658	141	192	258

利用してよかったこと(アンケートより) 複数回答可

	R3	R4	R5
1位	子どもが自由に遊べる 95%	子どもが自由に遊べる 95%	子どもが自由に遊べる 89%
2位	気分転換が出来る 62%	気分転換が出来る 52%	気分転換が出来る 56%
3位	子育てに関する情報が得られる 46%	子育てに関する情報が得られる 45%	他の利用者とは交流できる 55%

内訳	R1	R2	R3	R4
母親	10,007	4,004	5,464	7,636
父親	790	370	687	881
祖父母	369	76	85	146
プレパパ・プレママ	217	57	177	258
その他	72	37	49	85

利用したことによる自身の変化

	R3	R5
1位	地域を身近に感じるようになった 98%	子どもの成長の見通しがつくようになった 90%
2位	他の親の子どもへの対応が子育ての参考になった 96%	地域を身近に感じるようになった 88%
3位	子どもの成長の見通しがつくようになった 95%	他の親の子どもへの対応が子育ての参考になった 88%
4位	他の親子が困っているときに声掛けが出来るようになった 95%	他の親子が困っているときに声掛けが出来るようになった 87%
5位	悩みや孤立感の減少 94%	悩みや孤立感の減少 87%
6位	困った時に手を貸してといえるようになった 78%	困った時に手を貸してといえるようになった 69%
7位	自分のことを打ち明けられる相談相手が出来た 71%	自分のことを打ち明けられる相談相手が出来た 56%

そう思うとややそう思うを足した数値 データは四捨五入

1 安心して過ごせる環境作りと交流の場の工夫

- ①予約制(R4.6月より解除)、午前午後入替制、感染症対策等を行い、コロナ禍においても安心して利用してもらえるよう心掛けた。来館につながりにくい層(自宅から遠い、不便、行ったことがないので不安等)には、ホームページやSNS、イオンの情報コーナー等を活用し、ひろばの様子を伝え来所につながった。
- ②初めて利用する方に「はじめてバッチ」を用意し、初めての方同士、またいつもひろばを利用している方と交流が生まれるようスタッフがつないだ。また、初来所のきっかけとなるよう「はじめてDAY」を月1回開催。日々の平均登録者数3組に対し、「はじめてDAY」は9組登録と取組効果があった。

2 多様な人が訪れ関わり合える場の提供

- ①妊娠期の方に向けて、体験型のプログラム(沐浴・妊婦体験・ベビーマッサージ)や先輩ママによる手作り講座を開催し、終了後にひろば見学を促したり、先輩パパの体験を伝えたことで、利用者間交流につながった。また、産後参加できるプログラムを周知し、来所につながっている。
- ②様々な方が利用しやすいようにシニアボランティアや先輩ママボランティア、学生を配置したことで、親子と交流する姿が見られた。

3 子育て世代のニーズを把握し、事業に活かす

- ①ひろばの利用者アンケートや聞き取りを行い、結果をホームページや通信に掲載した。幼稚園、保育園入園後の生活を知りたい、パパ同士育児の悩みを話したい等の声から、対話形式(利用者同士のおしゃべり会)の取組を行っている。

4 子ども同士関わり合い育つ場、妊娠期から親同士がつながり学ぶ場の提供

- ①子どものおもちゃの取り合いなど、スタッフが子どもの人権を尊重し、気持ちに寄り添い代弁していくことを心掛けたことにより、養育者同士が子どものやり取りを見守る姿が見られた。子ども同士関わることの大切さも同時に伝えている。
- ②妊娠期の方に向けて、産後の身体や夫婦のコミュニケーションの大切さを伝えるオンライン講座を開催。参加者からは、「オンラインだと気軽に参加できる。産前に夫婦で話し合う事の必要性を学べて良かった」という声があった。
- ③産後2～5ヶ月の方に向けて、子どもへの愛着行動や仲間作りのプログラム(BPプログラム)を実施したり、父親同士、育児や仕事のことなど話す機会、先輩ママが自分の得意分野の情報を伝える機会を設け、継続した活動となっている。

評価の理由(区)

- ①母子手帳交付時に、はじめてDAY・プレパパプレママDAYの周知を積極的に行い、妊娠期から拠点につながるきっかけづくりを行った。区の両親教室や赤ちゃん教室、子育て支援連絡会、ほっとなまちづくり懇談会(地域福祉保健計画)で拠点スタッフが直接周知する場を調整し、顔の見える関係づくりを行った。
- ②養育支援が必要な家庭等に対して、地区担当保健師が拠点利用を促し、必要時同行する等して利用につなげた。区の両親教室後に拠点見学を取り入れることで、妊娠期から夫婦揃って拠点につながるきっかけづくりを行った。区からの委託事業として、実行委員会(親と子のつどいの広場、主任児童委員会、拠点)で実施したほどがやこどもニコニコフェスタで作成した親子の居場所紹介動画を区役所戸籍課モニターで放映し、1階入り口に拠点広報誌を配架することで、子育て世代以外の区民にも広く周知を行った。ひとり親や、障害を持つ養育者、障害のある子を育てる養育者も参加しやすくなる居場所の在り方を拠点と一緒に検討していきたい。
- ③拠点が実施しているアンケート結果や利用者の声、また地区担当保健師が把握した地域のニーズを区・拠点定例会で共有し、子育て世代のニーズ把握に努めた。見えてきた課題に対して、具体的に事業を見直したり、新たに事業を立案したりという点に関しては不足していたと感じるので、今後力を入れていきたい。区が令和4年度に実施した子育てアンケート結果に関しても、今後共有し、把握したニーズから、拠点の事業に反映させられるものがないか検討していきたい。
- ④拠点事業については、区・拠点定例会で報告を受け、また、実際に見学し、内容を確認した。実施結果について共有だけでなく、事業見直しの必要性についても検討できる場を設けていきたい。

拠点事業としての成果と課題

(成果)

- ①「はじめてDAY」については、登録者数など数的にも効果を上げている。今後は、コロナ禍以前のように集合形式で説明したり、地域の方に絵本を読んでもらうなど交流できる内容を増やしていく。
- ②「おとうさんと笑おう」のプログラムは、参加した方がゲストに、ゲストから企画、担い手へと循環している。今後も継続していく。
- ③妊娠期の体験型プログラムは希望者も多く、9割の方が参加して満足と答えている。その他のニーズも吸い上げ、事業に活かしていく。また区の両親教室後のひろば見学を継続し、妊娠期の方と、0歳児をはじめ利用者が関われる機会を増やしていく。

(課題)

- ①妊娠期プログラムについては、参加希望が多く全ての希望に応えられていない。区の両親教室含め、検討していく。
- ②「令和5年度こっころに関するアンケート」では、43.1%の方が妊娠期から利用できることを知らなかったという結果が出ている。妊娠期からの効果的な周知の継続と拡大が必要。
- ③サテライトが、地域の拠点としての機能を維持しながらも、地域性に合わせた多様な方の居場所となるよう取り組むことが重要である。
- ④年齢に即したプログラムや環境の設定、多様な方の居場所となるような拠点の在り方を検討する。

振り返りの視点

- ア いつでも気軽に訪れることができ、安心して過ごせるような配慮、工夫をしているか。
- イ 居場所を訪れる様々な利用者(養育者、子ども、ボランティア等)の間に、交流が生まれるように工夫しているか。
- ウ 多様な養育者と子どもを受け入れる配慮や工夫をしているか。
- エ 養育者と子どものニーズを把握するための工夫をしているか。
- オ 把握されたニーズを区関係機関と共有し、ニーズに応じて必要な支援や新たな事業、事業の見直しにつなげているか。
- カ 子どもの年齢・月齢に応じた遊びの環境が整備されているか。
- キ 子ども同士の関わりが尊重され、子どもが健やかに育つために必要なことに養育者が気付き、学ぶ機会を提供する場となっているか。
- ク 養育者同士が相談、情報交換し、課題解決し合う仕組みや仕掛けがあるか。

2 子育て相談事業

目指す拠点の姿	(参考)3期目振り返りの課題	自己評価(A~D)	
		法人	区
①養育者とスタッフとの間に安心して相談できる信頼関係ができ、気軽に相談ができる場となっている。	(事業評価当日からの課題) ・ひろばで対応する相談機能と子育てパートナーが関わるべきケース、関係機関が連携しなければいけないケースのすみわけをスタッフ全員が知ることが必要。 (振り返りシート・意見交換からの課題) ・個性が高く、専門相談や子育てパートナーに繋いだ方がよい相談については、スタッフが判断できるよう引き続き質の向上に努める。 ・発達に悩む方や外国の方、ふたご・みつごなど多様な利用者のピアサポートが出来る場が定期開催出来るよう計画していく。 ・養育者が潜在的に持つピアサポートの力を引き出すような声掛けが必要。	A	A
②相談を受け止め、内容に応じて、養育者を関係機関につなげている。また、必要に応じて継続したフォローができています。		B	A

評価の理由(法人)

(主なデータ)

相談実施状況(延べ件数)

相談項目	R1	R2	R3	R4
健康	288	106	174	156
生活	621	500	737	744
発育	463	386	673	504
しつけ	50	25	41	15
地域	227	102	131	147
親自身	236	91	157	173
仕事	147	68	91	113
家庭	168	78	105	133
就園	395	296	481	497
制度	6	15	27	42
介護	13	1	2	4
経済	2	0	1	1
その他	112	48	151	178
総数	2,728	1,716	2,771	2,707

専門相談実施状況(延べ件数)

専門相談員	R1	R2	R3	R4
保育士	251	274	395	327
栄養士	58	49	57	68
助産師	21	17	19	22
看護師	25	17	22	19
歯科衛生士		9	51	37
保育・教育・エンジェルジュ	75	34	106	112
総数	430	400	650	585

令和3年度 利用者アンケートより
 <子育てで悩んでいること、気になっていること> 複数回答可
 1位: 発達にあった関わり方・しつけ 50%
 2位: リフレッシュする時間がない 41%
 3位: 子どもを遊ばせる場がない 19%
 <コロナ禍において悩んでいること、心配なこと>
 ・子どもにいろいろ体験させることが出来ない
 ・マスクをしている大人としか関わらず発語が遅れないか心配
 ・外出が減り、テレビを見る時間が増えた
 ・ママ友と会う機会が少なくなり、子どもと2人での時間が多い 等

相談しやすい仕組みづくり

事業	回数	内容	感想
ふたご・みつご	月1回	情報提供 交流	・多胎育児の大変さを共有することが出来て、気持ちが少し楽になった ・ふたごを育てている支援者とも話せて、先の見通しがついた
お父さんと笑おう おとわらの日	月1回	父子で楽しむ 父親同士の 交流	・他のパパの悩みや考え方を聞いて共感できたし安心感につながった ・違う職種や家族の話を開けて学ぶことが多かった
外国人向け プログラム	年3~4回	情報提供 交流	・病院のかかりかたや子どもの預け方などわからないことが多い。誰に聞いていいかわからなかったのでみんなで話せてよかった。また相談したい

アウトリーチによる相談

事業	件数	主な相談内容
そと遊び	年25件 程度	<養育者相談> ・保育園情報 -砂遊びの効果や遊び方 ・他の子と遊ぶ機会がない -手作りおもちゃ ・妊娠中の兄弟児への対応 等
サロン 訪問	年8件 程度	<支援者相談>・コロナ禍の開催判断が難しい ・周知が行き届かない -補助金では運営が大変 ・担い手不足 -会場の確保・会場が古い ・支援者教材の貸出について知りたい 等

1 気軽に相談できる工夫とスタッフの質の向上に向けた取組

①ひろばにスタッフの写真とプロフィールを掲示し、気軽に相談してもらうことを心掛けた。何気ない会話から相談に移行することも多く、身近な相談相手として傾聴し、相談者の自己決定や養育者同士相談し合えるよう心掛けた。また、相談内容から新たなプログラムにつなげるなど、事業に活かすことが出来ている(入園前の不安についての相談から保育園パパママとの座談会を企画)。どのスタッフからも同じ情報を伝えられるように、スタッフ間で情報共有を行い、情報の見取り図を作成して活用している。

②相談対応についてはスタッフ会やミーティングで事例を検討し、対応の向上に努めた。また支援が必要と思われる親子を共有するためのノートを作成し、利用者支援事業につなげた(発達、病気、虐待等 月延べ27件程度)。また、発達に関する研修などの内部研修や外部研修に参加し、多岐に渡る相談対応に活かしている。

2 相談しやすい仕組みづくり

①相談者のニーズに対応するために、専門相談を継続して行った。通信やLINE、ホームページで開催日程を伝えたことで、相談日に合わせて来所する方も多い。発達に対する不安を抱える方が増加しており、保育士相談に加えて、令和5年度から療育センターの職員による相談を開始した。コロナ禍では、専門相談員による集合形式でのミニ講座は開催せず、よくある質問Q&Aをひろばに掲示したり、ホームページに掲載した。

②「ふたごみつごの日」、「お父さんと笑おう おとわらの日」、「外国籍の方の為の子どもの預け方講座」など利用者同士が悩みを共有しあう機会を提供し、新たな気付きがあったという声があった。発達に悩む方については、地域ケアプラザの音楽療法、地域活動ホームの講座や親子のつどいの広場でのおしゃべり会など他機関の取組に繋いでいる。

③外遊びや子育てサロン訪問等のアウトリーチによって、養育者や担い手の相談に対応することが出来た。

3 関係機関との連携

①多様な相談に対応するために、地域活動ホーム、地域訓練会あひるの会、西部地域療育センター、国際交流ラウンジ等関係機関とつながり、情報共有する場を持つなど関係づくりに努めている。

②横浜市立市民病院や区福祉保健課とつながり、がん検診啓発講座や健康チェックを、拠点やほどがやこどもニコニコフェスタで開催し、養育者に対して健康への意識付けを行った。またヘルスマイト(食生活等改善推進員)による講座を開催し、食生活に対する相談に対応することが出来た。

評価の理由(区)

①乳幼児健診や母子訪問、赤ちゃん教室で、拠点でも子育て相談ができることを積極的に周知してきた。また、母子手帳交付時、両親教室、妊娠期後期の手紙送付時にも周知を行い、妊娠期からの周知にも力を入れた。妊娠期のアンケートが開始され、妊娠後期の方と繋がる機会が増えるため、その際に拠点の周知も行っていく。区役所への相談だとハードルが高いと感じる方も、拠点だと気軽に相談できている方も多い。

②養育支援が必要な親子の場合、拠点来所時の見守りを依頼し、対応方法や支援の方向性について拠点と共有、支援してきた。また、区・拠点定例会や、ケースカンファレンス時に、相談対応の共有・振返りを行い、適宜助言や、支援に必要な情報提供を行った。

拠点事業としての成果と課題

(成果)

①保育園入園前の相談の増加により、入園前のプログラムを企画するなど相談から事業につなげることが出来ている。

②相談内容については、朝夕のミーティングやスタッフ会で共有し対応を検討することが出来ている。また、引継ぎノートを活用し、必要な方を利用者支援に繋げることができている。

③アウトリーチによって、拠点に来なくなった層、来れなくなった層の相談に応じることが出来た。

(課題)

①多様な相談に対応するために、外国人支援等について引き続き情報収集を行っていくことが必要。産前産後の相談については、区の助産師、母子保健コーディネーターとの課題共有が不足している。

②職場復帰する方が増加し拠点の利用期間が短くなっている中で、利用者同士相談出来るようスタッフがニーズを把握し、つないでいく必要がある。

振り返りの視点

ア 養育者が相談しやすい仕組みづくりや工夫をしているか。

イ どのような相談に対しても傾聴し、相手に寄り添う相談対応を行っているか。

ウ 相談内容の傾向を把握し、振り返りを行い、望ましい対応の検討や共有に努めているか。

エ 各種専門機関の役割を把握し、養育者への効果的な支援を行うための連携、連絡体制を作っているか。

オ 専門的対応が必要と考えられる相談について、適切に対応しているか。

カ 関係機関とつながった後にも、役割分担に応じて、継続的な関わりを持っているか。

3 情報収集・提供事業

目指す拠点の姿	(参考)3期目振り返りの課題	自己評価(A~D)	
		法人	区
①区内の子育てや子育て支援に関する情報が集約され、養育者や担い手に向けて提供されている。	(事業評価当日からの課題) ・保育園情報含め、保育ニーズの多様化への対応が必要。(保育ニーズから家庭の状況を知り支援につなげられることもある) ・発達支援については、目に入る情報を少なくするなど工夫が必要。	A	A
②子育てや子育て支援に関する情報の集約・提供の拠点であることが、区民に認知されている。	(振り返りシート・意見交換からの課題) ・外国の方への情報提供の仕方など更に工夫が必要。 ・利用者や子育て支援の担い手が情報発信に積極的に関わられるような仕組みの継続が必要。	B	A
③拠点の情報収集、発信の仕組みに、養育者や担い手が積極的に関わっている。	・SNSのメリット・デメリットを考慮しながら、効果的な情報発信方法を更に検討していく。	B	B

評価の理由(法人)

(主なデータ)									
ホームページアクセス数(延べ件数)				LINE登録者数(延べ人数)		ほぐびよ地域情報掲載数(延べ件数)			
R1	R2	R3	R4	R3	R4	R2	R3		
27,060	32,159	41,926	42,021	720	1259	199	255		
地域情報の収集先について ・関係機関(保育園、幼稚園、社会福祉協議会、地域ケアプラザ、地区センター、国際交流ラウンジ、国際交流協会等)・放課後デイサービス・自立支援協議会・生命保険会社・アートホール等音楽関係・イオンスタイル・UR機構・男女共同参画センター横浜・マザーズハローワーク・生活支援センター・タウンニュース・病院・助産師会				令和4年度利用者アンケートより <妊娠中に知りたかった情報> ・赤ちゃんのケア (抱っこやげっぷの仕方、沐浴、おむつ交換、着替え、肌荒れのケア) ・保育園、一時預かり・遊び場情報・赤ちゃんと一日の過ごし方 ・産後頼れる場所や行政機関 ・やっておくべきことや買っておいた方がいいもの ・パパも参加できるプログラム ・乳腺炎の予防法 ・誤飲や成長段階による家での怪我の危険箇所等					

1 ネットワークを活用した情報の収集・提供とコロナ禍におけるオンラインの活用

- ①子育て支援連絡会等のネットワークで拠点が情報収集・提供の場であることを周知続けたことで、地域の子育て情報が継続して届けられるようになっている。また、情報作成シートなどホームページから担い手が自ら情報提供できる仕組みを作り、地域のイベントカレンダー(ほぐびよ地域情報)に掲載している。就園や発育に関する相談の増加や父親の利用増加に伴い、ホームページの幼稚園、保育園情報やネットワークから得た発達支援(地域活動ホーム、地域訓練会、音楽療法等)の情報、父親向け情報のページを整え、閲覧者が増加している。ひろばアンケートの「妊娠中に知りたかった情報」を参考に情報を収集し、ホームページで妊娠期の方に提供した。
- ②スピーディで正確な発信を目指し、メールマガジンからLINE配信に移行した。定期的(週1回)に配信し、プログラムの急な変更や中止にも対応している。ホームページにも連動しており、LINEから預かり情報や相談、プログラム、地域の子育て情報、区の子育て情報のページにつながり、登録者も少しずつ増加している。
- ③コロナ禍には主任児童委員から、子育てサロンの開催情報を知らせるツールがないとの相談を受け、ホームページの地域の子育て情報に掲載。継続して周知している。令和2年のひろば閉館時には、メールマガジンで困っていることなどアンケートを実施。3日で90通の声が届き、子育て家庭の現状を、関係機関や地域の方々に伝えることが出来た。
- ④区とほぐびよマップの更新を行い、養育者のニーズに合った情報と共に説明しながら直接手渡ししている。転居してきた方にも喜ばれている。
- ⑤国際交流ラウンジ協力のもと、外国籍の方に向けてホームページを見直した。また、子どもの預け方や病院の掛かり方情報を提供したり、わかりやすいイラスト表示、事務書類を作成することが出来た。区地域振興課主催の「外国人向けサポーター講座」では、区民に拠点の外国人支援の取組を紹介することが出来た。

2 広く区民に向けた子育て情報の発信

- ①広報よこはま、関係機関の通信、タウンニュース等に拠点の事業について掲載し、拠点が情報収集・発信の場であることの発信を継続した。また、父親向けプログラムやサテライト情報をケーブルテレビで紹介するなど情報ツールを活用し、情報が行き届かない層に向けて配信した。
- ②近隣の商業施設に情報ボードを設置して情報提供し、拠点への来館を促している。(イオンスタイルとの包括連携協定)
- ③区の地域福祉保健計画(ほっとなまちづくり)推進会議で、拠点の事業について伝えたことがきっかけとなり、区民会議で発行した冊子に就学前の親子の施設について掲載してもらうことが出来た。
- ④子育てサポートシステムや子育てパートナーの相談から、産前支援や一時預かりの情報を収集し、ホームページを通じて提供している。

3 情報収集・提供に養育者・担い手が関わる取組

- ①地域の親子サークルと一緒に公園や店舗などの地域資源を取材し、拠点発行の通信(こころだより)に掲載した。その際、親子サークル情報も掲載し周知に努めた。また養育者にテーマ(防災、妊娠期、父親等)に応じたアンケートに協力してもらい、通信に記事を掲載し、地域の方、関係機関、学生など広く区民に提供することが出来た。
- ②地域で活動する養育者や担い手が、ひろばにおいて自ら情報発信出来るよう日頃から声掛けをしている。
- ③ぱぱままぼとどを設置し、リサイクル品の交換などに活用されている。

評価の理由(区)
<p>①拠点と共にほどびよマップを更新し、こんにちは赤ちゃん訪問時に全数配布を行い、区民や地域の支援者に子育て情報を発信してきた。拠点のホームページの「地域の子育て情報」に最新の詳細情報が掲載されているので、そこにつながる仕組みづくりを行っていききたい。</p> <p>②妊娠後期の手紙、こんにちは赤ちゃん訪問、4か月児健診、民生委員児童委員協議会でこころリーフレット、LINEのお知らせを配布し、拠点で子育てに関する情報の集約・提供が為されていることを周知している。また、子育て支援連絡会やほっとなまちづくり懇談会(地域福祉保健計画)に拠点と共に出席し、周知も行った。</p> <p>③子育て支援連絡会等を通じて、地域の子育て関連情報を拠点が発信する仕組みづくりを共に模索していく。また、区の事業等で把握した人材を拠点につなぐ視点も持っていく。今後も当事者の声を拠点を通じて発信できる方法について共に検討していききたい。</p>

拠点事業としての成果と課題
<p>(成果)</p> <p>①「いってみよう保育園」(外遊び)など保育園訪問時や子育て支援連絡会において保育園情報の収集に努め、職場復帰組のニーズに応えることが出来た。また保育園の職員が情報提供に来館した際には、利用者に直接情報を手渡ししてもらうよう努めた。</p> <p>②LINE配信をスタートし、妊娠期からの登録に努めた。また商業施設(イオンスタイル)に情報ボードを設置し、拠点を利用したことがない方の来館につながっている。</p> <p>③コロナ禍において、パパ向けプログラムのオンライン配信やオンライン懇親会、プレパパ・プレママオンライン講座、支援者研修ハイブリット配信など、来館しなくても学び、交流できるツールを検討し配信した。またスタッフ会や外部との会議にzoomを活用し、情報共有の効率化を図ることが出来た。</p> <p>④どのスタッフからも同じ情報を伝えられるように、スタッフ間で情報共有を行い、情報の見取り図を作成して活用している。</p> <p>(課題)</p> <p>①妊娠期の方の利用につながるような情報発信について区・拠点共に更なる検討が必要。</p> <p>②外国籍、ひとり親、DV、貧困等多様な情報を収集し、提供していく必要がある。</p> <p>③養育者や担い手が情報収集・提供に関われる仕組みについて引き続き検討が必要。</p> <p>④SNSの効果的な併用について考えていく必要がある。</p>

振り返りの視点
<p>ア 養育者や担い手が必要としている情報が何かをとらえ、区内の幅広い地域の子育てや子育て支援情報を収集・提供しているか。</p> <p>イ 来所が困難な養育者や担い手も含め、情報を入手しやすいよう、さまざまな媒体や拠点以外の場を通して情報発信しているか。</p> <p>ウ 利用者が情報を入手しやすく、自ら選べるひろば内の工夫をしているか。</p> <p>エ ネットワークを活かして情報を収集し、を養育者や担い手に提供しているか。</p> <p>オ 様々な子育て支援情報を拠点が集め、提供していることを広く区民に周知しているか。</p> <p>カ 養育者や担い手から拠点に情報が届けられる仕組みや工夫があるか。</p> <p>キ 情報収集・提供の企画に養育者や担い手が関わる仕組みや工夫があるか。</p>

4 ネットワーク事業

目指す拠点の姿	(参考)3期目振り返りの課題	自己評価(A~D)	
		法人	区
①地域の子育て支援活動を活性化するためのネットワークを構築・推進している。	(事業評価当日からの課題) ・虐待予防のためにも、子育てサロンから拠点に繋いでもらうよう依頼するなど、各機関がそれぞれ窓口となる役割が必要。	A	A
②ネットワークを活かして、拠点利用者を地域へつないでいる。	(振り返りシート・意見交換からの課題) ・エリア別子育て支援連絡会等で、親子の現状を継続して発信し、ネットワークを活用し課題解決を行えるよう、幼稚園等のネットワークのメンバーを広げていくことが必要。	B	B

評価の理由(法人)

(主なデータ)

エリア別子育て支援連絡会

内訳	R1	R2	R3	R4
開催数(延べ回数)	23	8	11	18
参加者数(延べ人数)	461	152	237	381

エリア別子育て支援連絡会参加者内訳

内訳	R2	R3	R4
地域(延べ人数)	35	65	112
関係機関(延べ人数)	117	172	269

事務局: 区社会福祉協議会、センター園、地域ケアプラザ、区、拠点

他機関との連携事業

ネットワーク	事業名	R2参加者	R3参加者	R4参加者
保育園、ボランティア、子育てサポートシステム提供会員、土木事務所、社会福祉協議会、拠点	そと遊び	120人/12回	249人/13回	202人/15回
親と子のつどいの広場、主任児童委員、区役所、地域ケアプラザ、拠点	ほ도가やこどもニコニコフェスタ	ZOOM配信 youtube配信 約900名	214人/7か所	184人/7か所
親と子のつどいの広場、子育て支援者、ボランティア、子育てサポートシステム提供会員、拠点	親子サークル連絡会	中止	44人/2回 (ZOOM)	34人/1回
保土ヶ谷国際交流ラウンジ、区保育・教育コンシェルジュ、国際交流協会、ボランティア、拠点	外国人向け講座	25人/2回	9人/1回	10人/1回
地域活動ホーム、地域訓練会、市社会福祉協議会、療育センター、区、拠点	きらきら連絡会	21人/3回	12人/2回	18人/2回
区社会福祉協議会、ボランティア、子育てサロン、拠点	ボランティア講座	/	27人/3回	30名/3回
保育園、拠点、保土ヶ谷消防署、資源循環局、区、拠点	ほがらか広場	中止	中止	252人/1回

1 ネットワークの構築・推進の継続

- ①子育て支援連絡会全体会では主に講演会、エリアの取組発表を行い、子育て支援の意識・知識の向上につなげることを心掛けた。令和3年度からは、全体会の事務局(区、拠点、区社会福祉協議会、保育園センター園)に、新たに地域ケアプラザが参加し、地域との繋がりがより強まり、改めて子育て支援連絡会の在り方について、検討することが出来た。エリア別子育て支援連絡会では、地域ごとのアセスメントや課題の抽出を行い、課題解決に向けた意見交換や取組を行っている。地区社会福祉協議会や自治会、民生委員・児童委員、主任児童委員など地域の方々に連絡会の主旨を説明し、連絡会への参加を呼びかけたことで、地域の方の参加も増えてきている。地域福祉保健計画と連動し、ともに子育てしやすい地域作りを目指す方向性が出てきている。
- ②区内の保育園と連携し、外遊び事業を継続している。コロナ禍で家からなかなか出られない親子が増加している中、自宅から近い保育園や公園で保育士と一緒に遊び、外遊びの楽しさを伝えることを大切にしている。園庭開放などその後の利用に結び付け、保育園を地域の子育て資源の一つとして親子や地域の担い手に周知することが出来ている。
- ③地域ケアプラザと共催で、幼稚園入園前の育児不安軽減を目的に、入園前の養育者と入園後の先輩パパママとの座談会を開催している。近年、保育園入所が増加し、保育園入園前の相談が増えたことにより、保育園の先輩パパママと話す会を企画し、入園後の生活を知ることが出来安心したと好評である。今後も継続していく。
- ④外国籍の方より、子どもの預け方や病院の掛かり方がわかりにくいと相談があり、国際交流ラウンジや地域の小児科と共催で講座を開催している。当日は通訳ボランティアの協力もあり、外国籍の方からはよく理解できたと感想があった。
- ⑤発達に悩む養育者に向けて、地域活動ホーム、横浜市西部地域療育センター、地域訓練会、区と連携し、情報交換や個々の取組に協力しあうなど、連携を深めている。また地域ケアプラザ主催の音楽療法に繋ぎ、養育者からは子どもの居場所が出来てよかったとの声もある。
- ⑥区地域福祉保健計画推進会議で、拠点のネットワーク事業について紹介する機会を得た。地域の自治会長からは、いろいろな関係団体と連携することにより、事業展開に広がりが出て、子育てしやすいまちづくりを進めるうえで、大きな効果を期待できることがわかったという声があった。地域の方々の声や拠点利用者の声は、子育て支援連絡会で伝えていくことを心掛けている。

2 拠点の機能を活かし養育者と地域をつなぐ

- ①地域の子育て資源の情報提供、虐待予防を目的に、区からの委託事業として、実行委員会(親と子のつどいの広場、主任児童委員会、拠点)で実施したほどがやこどもニコニコフェスタでは、区内7つ(令和5年度からは8つ)の地域ケアプラザを会場に親子で楽しめるプログラムを開催した。また地域の施設の動画を作成し、youtube配信や区役所1階モニターで放映。多くの区民に周知している。
- ②エリア別子育て支援連絡会で地域の方々から得た情報を、掲示やホームページで養育者に提供することが出来ている。

評価の理由(区)

- ①区、拠点、ケアプラザ、区社会福祉協議会が事務局となり、ケアプラザエリア別子育て支援連絡会を定期的に開催している。地域の方々と、保育園、幼稚園、主任児童委員、民生委員、地区センター等、子育て関連施設が集まり、情報共有とエリア毎の課題について話し合いの場が持たれている。地域福祉保健計画と連動して、地区ごとの活動に落とし込めるよう事務局を中心に話し合いを進めている。
- ②発達に不安を抱えた親子について、拠点から区へ繋いでいただき、あひるの会(地域訓練会)や地域ケアプラザの音楽療法等、適切な支援が受けられる居場所に繋いでいる。ネットワークを活かして紹介先を拡げていけるとよい。また、子育て支援連絡会を通じて繋がった関係機関・者に、拠点が把握している担い手やボランティア養成講座修了者をニーズに応じて繋げられるよう、共に可能性を模索していきたい。

拠点事業としての成果と課題

(成果・方向性)

- ①エリア別子育て支援連絡会の開催に、地域の方々の参加が増え、共に地域の特徴や課題を共有することが出来るようになってきた。今後も虐待のない子育てしやすいまちづくりを目指す。

(課題)

- ①企業とのつながりも視野に入れて、多様な親子に向けたネットワークの構築について検討していく必要がある。
- ②子育て支援連絡会では、メンバーそれぞれの施設や団体等の特徴や地域での役割を共有しているが充分ではない。拠点は、養育者、住民の声を届ける役割であることを意識して、発信していくことが必要。
- ③地域福祉保健計画について区民への周知が不足している。子育て支援連絡会を通じて伝えていく。
- ④地域のどこにいても支援が受けられるようなネットワークを構築していく。
- ⑤サテライトでは子育て支援関係者のニーズを踏まえ、地域の特性を活かしたネットワークを構築していくことが必要。

振り返りの視点

ア 地域の子育て支援関係者が、互いに知り合い、理解し、子育て家庭の状況及び子育て支援の情報や課題を共有するための場、機会をつくりだしているか。

イ 地域の子育て支援関係者が協力し、支え合えるように、関係者同士をつないでいるか。

ウ 子育て家庭や地域の子育て支援関係者のニーズを踏まえ、子育て支援分野に限らず、様々な社会資源と連携・協力した取組を実施しているか。

エ 養育者や子育て支援活動に関心のある人を身近な地域の子育て支援の場や地域の活動につなげているか。

5 人材育成・活動支援事業

目指す拠点の姿	(参考)3期目振り返りの課題	自己評価(A~D)	
		法人	区
①地域の子育て支援活動を活性化するため、担い手を支えることができている。	(事業評価当日からの課題) ・自治会など地域の方々と一緒に地域課題に取り組むことが必要。 ・子育てしている養育者を担い手につなげることを意識していく。	A	A
②養育者に対して地域活動の大切さを伝えるとともに、地域の子育て支援活動に関心のある人が、活動に参加するきっかけを作っている。	(振り返りシート・意見交換からの課題) ・利用者や子どもの代弁者として、親子の孤立や子どもの育ちについて地域で考えてもらえるような発信の方法を考えていく。 ・親子サークル連絡会の開催回数や内容を検討し、親達が自主的に運営できる親子サークルが継続して運営していけるよう支援していく。	B	B
③広く市民に対して、子育て家庭を温かく見守る地域全体での雰囲気づくりに取り組んでいる。		A	A
④これから子育て当事者となる市民に対して、子育てについて考え、学び合えるように働きかけている。		B	B

評価の理由(法人)

(主なデータ)

ボランティア年間活動数(延べ件数)			
	R2	R3	R4
シニア	82	234	316
サポーター(先輩ママ)	111	142	88
父	19	0	0
学生	7	1	17
その他	7	14	0
計	226	391	421

支援者教材貸出数(延べ件数)			
	R2	R3	R4
貸出回数	77	97	175
教材数	114	133	249

貸出先: 子育てサロン、子育て支援者、親子サークル、親と子のつどいの広場、保育園、幼稚園、地域活動ホーム、ボランティアサークル、イベント講師 等

養育者・担い手を地域へつなぐ	
養育者・担い手	繋ぎ先
ボランティア	親と子のつどいの広場
イベント講師	親と子のつどいの広場・地域ケアプラザ コミュニティハウス・他拠点
おとわらの日※ゲスト	区の両親教室 子育てサロン
ほどばいば(パパサークル)	ほどがや子どもニコニコフェスタでのミニコンサート
ママバンド	地域ケアプラザ ほどがや子どもニコニコフェスタでのミニコンサート
リトミックグループ	ログハウス ほどがや子どもニコニコフェスタでの音遊び
国際交流部	地域ケアプラザまつりでの読み聞かせ

※おとわらの日 第3土曜日パパ向けプログラム「お父さんと笑おう」

1 地域の担い手への支援

- ①ボランティア交流会を実施し日々の活動の中での困りごとを共有したり、得意なことなどを紹介し合うなど活動意欲の向上に努めた。ボランティアの中でも特にシニアの活動者数、日数が増加し、ひろばでの見守りや社会福祉協議会の折り紙ボランティアの活動など、子どもと触れ合うことで元気になれると言う声がきかれた。
- ②支援者向けアンケートの声から「子どもとの関わり方」「発達に悩む親子への支援」を学ぶ研修会を実施し、参加者からは「子どもや子育てに悩む養育者の気持ちを理解することの大切さを知った。今後の活動に活かしていきたい」という感想が多かった。
- ③親子サークルや支援者相談から担い手不足という課題が出たので、区社会福祉協議会と共催でボランティア養成講座を開催した。その結果、学生を含む新たな人材に地域の施設を紹介することが出来た。
- ④子育て支援者の定例会を拠点で開催し、子育ての現状を共有したり、利用者支援や子育てサポートシステムなど拠点の事業を伝えることが出来た。
- ⑤子育てサロン運営者など地域の方や保育園など関係機関にむけて、支援者教材の貸し出しを継続している。身近な場所で教材を準備でき、子ども達にも喜ばれたという声が多かった。

2 養育者を地域の活動に繋ぐ

- ①親子サークル連絡会(オンラインを含む)を区6か所の親と子のつどいの広場と共催し、サークル同士の交流の場を提供した。メンバーの減少などの課題に対して、ひろば内に親子サークルのポスターを掲示できるコーナーを新設し、養育者にサークル活動を周知することが出来た。また親子サークルのメンバーが拠点の通信記事作成に関わる機会を提供し、親子サークルの周知にもつながった。
- ②父親向けプログラムの「お父さんと笑おう」の参加者(対談のゲスト)を子育てサロンにつないだり、また音楽や体操、手芸など活動に関心がある方へログハウスなど活動の場の提供を行った。

3 子育てしやすいまちづくりへの提案

- ①区地域福祉保健計画推進会議や地区社会福祉協議会懇親会などに参加し、子育ての現状や拠点の事業について伝え、子育て支援連絡会への参加を促した。子育て支援連絡会への地域の方の参加は年々増加し、連絡会ではアセスメントによる地域毎の特徴や親子の孤立化など課題を共有し、取組を考えることが出来た。(ネットワーク基本データ参照)

4 学生や妊娠期の方に向けての取組

- ①区社会福祉協議会や地域の中学校、高校と連携し、学生に親子と関わる機会を提供したり、地域の社会資源を伝え、ボランティア登録にもつながった。また、近隣の小学校の社会の授業へ協力し、教師を通じて子ども達に拠点の事業について伝えることが出来た。(6年生 社会 税金の使い方)
- ②妊娠期の方に向けて、沐浴、妊婦体験など体験型講座を開催するとともに、0歳児の親子と交流する場を設けその後の拠点利用につなげた。また助産師によるオンライン講座を開催し、産後の身体や心、夫婦のコミュニケーションの大切さについて学ぶ機会を企画し、参加者からは産前から夫婦で話し合うことの大切さが分かってよかったという声が聞かれた。

評価の理由(区)

- ①エリア別子育て支援連絡会をより充実させたものとするため、子育て支援連絡会事務局研修や、子育て支援連絡会全体会を実施した。また、拠点における支援者研修の講師として、心理士の先生を紹介し、発達に課題を抱える親子への支援について学ぶ場をつくった。子育て支援者の定例会を拠点で開催し、お互いの活動について情報交換を行う場を設定した。
- ②親子サークル連絡会に子育て支援者と共に参加した。連絡会で出てきた課題や、今の時代に合わせたサークルの在り方、今後の支援の方向性について、拠点と共に検討していく必要がある。また、赤ちゃん教室に参加している養育者に区の両親教室の講師(先輩パパママ)として参加してもらい、支援者側の役割も担ってもらっている。
- ③地域の会議に出席し、今まで関係機関の参加が主だった子育て支援連絡会への地域の方々の参加を促し、参加を得ることができた。地域の方々にも子育て世代の現状や課題を伝え、地域での見守りの大切さを伝える機会を持っている。
- ④小学校へのお前講座を実施し、これから親になる世代に対して、子育てについて考え学ぶ場を作った。今後同様の機会を得た場合、事前に拠点に情報提供を行い、相互に取り組めることがないか検討していきたい。また、区の両親教室において、先輩パパ先輩ママとプレパパプレママと交流する機会をつくり、相互に学び合うことができている。

拠点事業としての成果と課題

(成果)

- ①区社会福祉協議会ボランティアセンターや地域の高校との連携により、新たにボランティア活動をする方が増加している。また、中学校とつながり、職業体験の受入を行い、学生が子どもと関わる体験や地域の子育て資源を知るなど、子育てへの関心を高めることが出来た。
- ②地区社会福祉協議会や民生委員・児童委員等の会議に出向き、子育ての現状や課題を伝え、エリア別子育て支援連絡会への参加を促したことで、連絡会への地域の方の参加が増加し、地域の課題について話し合える場になっている。
- ③担い手の活動意欲の向上に向けて、ハイブリット開催などオンラインを取り入れた研修会を開催することが出来た。今後も対面とオンラインを併用するなど、開催方法を考えていく。
- ④地域の担い手不足に対し、拠点で活動する方を、地域の活動に繋いだ。

(課題)

- ①担い手不足が地域の課題となっている。引き続き、拠点で活動する担い手や新たな担い手を地域の活動につなげ、安心して活動できるよう、施設の課題等を事前に共有したり、企業と地域活動を結びつけることができないか模索していくことが必要である。また、ボランティア活動を種別ごとに一元化し、やりたい活動を選べるようなツールが作成できるとよい。
- ②大学生ボランティアについては、横浜国立大学に募集チラシを届けるなどアプローチしたが、コロナ禍もありなかなか活動に結びつかなかった。
- ③地域の方の子育て支援連絡会への参加者が増加しているが、今後継続して共に子育てしやすいまちづくりを目指していけるよう、連絡会の内容をさらに検討していく必要がある。
- ④職場復帰する方が増加し、親子サークル数が4年前より減少している。親子サークル運営者等の当事者を、子育て支援連絡会等の地域の会議に繋げ、活動を行う上での課題やニーズを吸い上げ、地域での課題として捉えていくなど、今度の支援の方向性を検討していく必要がある。

振り返りの視点

- ア 地域で子育て支援に関わる人が増えているか。かつ新たな担い手を発掘・養成する取組がなされているか。
- イ 子育て家庭や担い手のニーズを踏まえ、活動意欲の向上やスキルアップにつながる取組がなされているか。
- ウ 地域の子育て支援活動がより充実されるよう、必要に応じて新たな活動希望者を結び付けているか。
- エ 養育者が地域を身近に感じ、地域の活動に関心を持てるように働きかけているか。
- オ 活動希望を丁寧に受け止め、拠点内の活動や身近な子育て支援活動等に結び付けているか。
- カ 子育ての現状や子育て支援の必要性を周知・啓発しているか。
- キ 子育て家庭(妊娠期の方を含む)を温かく見る気持ちを持つことができるように働きかけているか。
- ク これから子育て当事者となる市民と子育て中の親子がふれあい、学び合う機会や場を作っているか。

6 横浜子育てサポートシステム区支部事務局運営事業

目指す拠点の姿	(参考)2期目振り返りの課題	自己評価(A~D)	
		法人	区
①子育てサポートシステムに、多くの区民の参画が得られている。	(事業評価当日からの課題) ・法人の理念とあわせて、地域の方が子育てに関わる重要性を伝えていくことが必要。 (振り返りシート・意見交換からの課題) ・外国の方、障がいの方のコーディネートについては、関係機関と協力して検討していく。 ・SNS等連絡方法の検討をしていく。 ・リフレッシュ等ニーズに合った預かりの在り方を検討していく。	B	B
②養育者にとって、必要な時に利用しやすい事業となっている。		B	B
③会員が地域の支え合いの良さ、大切さを理解しながら、利用や活動を継続できるように、支えることが出来ている。		A	A
④養育者の利用相談内容に応じて、子育て相談や他機関等の情報を提供し、必要な支援につなげている。		A	A

評価の理由(法人)

(主なデータ)

会員数(人)

内訳	R1	R2	R3	R4
利用会員	480	430	453	507
提供会員	87	77	88	104
両方会員	36	29	28	29
計	603	536	569	640

活動内容別件数(延べ件数)

依頼内容	R1	R2	R3	R4
利用会員宅預かり	94	33	78	123
保育園・幼稚園等の送迎	206	142	124	199
習い事・塾の送迎	37	20	240	261
学童保育等の送迎	15	0	76	54
学童保育等の下校時の預かり	25	0	0	36
提供会員宅預かり	69	52	66	34
地域子育て支援拠点・親と子のつどいの広場での預かり	62	45	59	80
小学校登下校時送迎と預かり	85	24	0	0
保育園・幼稚園と帰宅後の預かり	31	32	94	103
その他	24	27	5	42
計	648	375	742	932

みまもりたい活動数(延べ件数)

R2	R3	R4
7	15	15

入会説明会

内訳	R1	R2	R3	R4
拠点入会説明会(延べ件数)	25	12	31	36
参加者数(人)	187	76	162	202
個別入会説明会(延べ件数)	39	51	30	40
参加者数(延べ)	53	60	38	45
出張入会説明会(延べ件数)	2	1	9	12
参加者合計数(人)	240	136	200	247

あまちゃミーティング活動数(回)

R1	R2	R3	R4
64	22	47	71

出張説明会 開催状況

年度	開催場所	回数	参加数(人)	登録数(人)
R2	親と子のつどいの広場とびあ	1	2	1
	親と子のつどいの広場とびあ	5	11	9
R3	初音ヶ丘地区センター	1	4	2
	西谷地区センター	1	2	2
	イコットハウス	1	4	3
	常盤台地域ケアプラザ	1	2	0
	子育てサロン ピッコロ	1	6	0
R4	親と子のつどいの広場とびあ	6	13	9
	親と子のつどいの広場ママママ	1	4	0
	西谷地区センター	1	3	3
	星の丘ビューシティ	1	5	2
	保土ヶ谷公会堂	1	4	4
	ときわの森	1	5	1
	子育てサロン ピッコロ	1	4	0

<p>1. 周知活動と提供会員拡大に向けての取組</p> <p>①区広報やタウンニュースへの掲載、母子手帳交付時やこんには赤ちゃん訪問員定例会での周知の他、ホームページ・LINE等オンラインを活用し、子育てサポートシステムの仕組みを周知し登録につながった。</p> <p>②利用会員に対して提供会員(子どもの預かり手)が4:1と不足している為、拠点の他事業や、民生委員・児童委員協議会、区内小学校での周知や、地域で提供会員向け入会説明会を実施し、地域の方が子育てに関わることの大切さを伝え続けた。地域での説明会は効果があり提供会員の登録に結びついた。</p> <p>2. 利用しやすくなるための取組</p> <p>①検索しやすくなりやすい情報提供を目指して、ホームページの子育てサポートシステムの内容を整理している。今後も会員の声を活かし、改善していく。</p> <p>②さまざまな家庭のライフスタイルに合わせて、入会説明会を平日と土曜日に設定したり、養育者が必要時に利用しやすくなるために、親と子のつどいの広場やコミュニティハウスなど地域の施設に出向いて出張説明会を実施した。また近隣の商業施設にチラシを配架し、気軽に利用できるように努めた。</p> <p>③ひろばやホームページ、通信に利用した方の声を掲示掲載し、安心して利用できることをPRした。</p> <p>3. 利用・活動の継続と質の向上のための取組</p> <p>①地域の預け・預かり合いの良さを理解し継続して利用してもらえるよう、事前打合せにはコーディネーターが同席し、丁寧な対応を心掛けた。また活動を継続できるよう、両方・提供会員とコーディネーターの面談(あまちゃミーティング)を開催し、会員に適した活動につなげられるよう配慮した。活動の少ない会員には、外遊びなどのイベント開催時の子どもの見守りなど(みまもりたい活動)を紹介した。</p> <p>②アンケートからニーズを吸い上げ、「子どもとの関わり方」や「発達に悩む親子への支援」を学ぶ研修や救命救急研修を実施し、質の向上に努めた。また、入会説明会やあまちゃミーティングの時に、個人情報や安全な預かりについての啓発を行った。</p> <p>③会員同士の関わり合いの場として交流会を企画実施した。手作り品を作りながらおしゃべりしたり、コロナ禍にはオンラインを活用した交流会を実施し、気軽に参加することが出来たと好評だった。</p> <p>4. 利用相談に応じた情報提供</p> <p>①預かり希望の方の相談内容によっては、子サポ以外の資源の情報提供を行った(乳幼児一時預かり、休日保育、親と子のつどいの広場一時預かり等、令和4年度相談対応のみ 34件)会員登録した方には、預かり依頼時、事前打ち合わせ時、預かり終了後に会員のニーズを把握し対応することを心掛けた。コロナ禍においては里帰りが難しい状況の中で、産前産後の預かり相談や兄弟児の送迎依頼などに対応した。</p> <p>②特に配慮が必要な相談は区担当保健師と連携し、対応することを心掛けた。</p>
--

評価の理由(区)

<p>①母子手帳交付時や乳幼児健診等で子育てサポートシステムについてのチラシを配布し、広く周知を行った。母子手帳交付時面接や、母子訪問、乳幼児健診等で把握した、事業利用が必要な方には具体的に周知を行い、利用を勧めている。また、子育て支援連絡会で、未就園の子が地域に半数近くいること、実家も遠方で孤立している親が多いこと、子どもを預けるニーズが高いことと併せて、子育てサポートシステムの現状を、地域の課題として伝えている。今年度は、区連合町内会長連絡会で子育てサポートシステムについて周知を行った。</p> <p>②急を要する方や、個別の対応が必要な方に関しては、コーディネーターに依頼し、同行訪問にて登録・利用を進めてきた。</p> <p>③子育てサポートシステムに関する研修開催に関して、講師の調整や、会場の確保を行って支援した。</p> <p>④子育てサポートシステムの利用を通して、専門的な対応が必要と考えられる方については、本人の同意のもとで地区担当保健師に情報提供を行い、継続支援につなげた。</p>

拠点事業としての成果と課題

<p>(成果)</p> <p>①区広報、タウンニュースでの周知、地域での提供会員向け入会説明会の実施や他事業での周知等により、提供会員が増加した。説明会では子育ての現状や、地域の方が子育てに関わる大切さについて伝えることが出来た。</p> <p>②子育てサポートシステムの相談、利用を通して、支援が必要と判断された方に対して、拠点と区が連携して支援することができた。</p> <p>③子育てサポートシステムの利用に繋がらなくても、他の資源を紹介し、繋げることができた。</p> <p>(課題)</p> <p>①預けたい方に対して、預かり手が不足している。地域毎の提供会員と利用会員のバランスも考慮して、区連合町内会長連絡会、民生委員・児童委員協議会など、拠点と区が役割分担して、周知をしていく必要がある。</p> <p>②「令和5年こころに関するアンケート」では、子育てサポートシステムを知っている方は65%で、実際に利用した方は10.4%。新しく制度も変わるので、入会説明会の申込みや説明会にSNSを活用するなど利用促進について工夫していくことが重要である。</p> <p>③SNSによる提供会員への連絡については、検討したが実施に結びついていない。</p> <p>④多様化する預かりに向けて報告書を丁寧に読み、気づいたことは連絡し、利用会員と提供会員の信頼関係づくりに努める必要がある。また利用者支援事業との連携も継続していく。</p> <p>⑤多様な人との関わりの中で社会性が育っていくという子サポの良さを地域に伝えていく必要がある。</p>
--

<p>振り返りの視点</p> <p>ア 区民に対して、子育てサポートシステムについての周知活動を行っているか。</p> <p>イ 提供会員数拡大に向けた取組がなされているか。</p> <p>ウ 就労に関する以外の養育者のリフレッシュ等の理由での利用を含め、利用したい人が利用に結びつくための工夫をしているか。</p> <p>エ 会員が相互の合意のもとに安心安全な活動できるよう、丁寧なコーディネートができているか。</p> <p>オ 会員の声の把握に努め、必要に応じて活動内容の調整や追加のフォロー等を行っているか。</p> <p>カ 活動における事故防止のための講習、個人情報取扱いに関する注意喚起など、会員への安全対策をはかっているか。</p> <p>キ 提供・両方会員が安心・安全な活動を継続して行えるよう研修会等の取組がなされているか。</p> <p>ク 会員が活動の意義を感じられ、会員間の親睦を深め信頼関係の構築のため、会員間の交流をはかる取組がなされているか。</p> <p>ケ 援助活動の調整時や会員の声から把握した子育てのニーズを地域子育て支援拠点としての事業に活かしているか(新たな事業の実施や事業の見直しなど)</p> <p>コ 利用相談の内容に応じて、子育てサポートシステム以外のサービス等の情報提供や関係機関に適切につないでいるか。</p> <p>サ 専門対応が必要と考えられる相談については、専門機関に適切につないでいるか。</p>

7 利用者支援事業

目指す拠点の姿	(参考)1期目振り返りの課題	自己評価(A~D)	
		法人	区
①拠点における利用者支援事業が、区民や関係機関に広く認知されている。	(事業評価当日からの課題) ・ひとり親などハイリスク層をカバー出来ているか確認が必要。課題を共有して対応していく。 ・利用者のひろばでの雰囲気やその家庭の特性を把握したうえでつなぐ高度な業務なので、資源に精通していることが大事。	B	B
②相談者に寄り添い主体性を尊重しながら、個別相談に応じ、適切な支援を行っている。	・基本型と母子保健型の違いを理解する。(区) (振り返りシート・意見交換からの課題) ・利用期間が短いのでより効果のある周知方法を検討していく。	A	A
③子育て家庭を支えるためのネットワークの一員として、包括的な視点を持って子ども・子育て支援に関する関係機関や地域の社会資源との協働の関係づくりを行っている。	・相談が多岐に渡っているため、新たな繋ぎ先との関係づくり、新たな取り組みを視野に入れて事業を行う。 ・出張が多く1人では対応できない。	B	B

評価の理由(法人)

(主なデータ)

個別相談数(延べ件数)

	R1	R2	R3	R4
対面	220	177	210	568
対面(個室)	15	7	11	4
電話	52	69	46	52
出張相談	47	28	38	43
その他	3	0	4	16
計	337	281	309	683

相談者種別(延べ件数)

	R1	R2	R3	R4
母	308	262	295	569
父	17	17	23	28
祖母	7	1	1	11
祖父	0	0	1	0
プレママ	0	1	2	4
プレパパ	0	1	0	1
その他	21	16	6	8

相談内容(延べ件数)

	R1	R2	R3	R4
子どもの生活	124	139	135	299
子どもの発育・発達	116	88	100	320
親自身	109	115	109	202
就園・就学	48	30	46	98
子どものしつけ	33	36	24	37
子どもの健康	25	18	21	76

仲介・支援依頼数(延べ件数)

仲介・支援依頼場所	R1	R2	R3	R4
1 保健師・助産師	94	100	93	301
2 区保育・教育コンシェルジュ	5	0	4	0
3 区ケースワーカー	2	0	0	12
4 区その他	1	0	0	1
5 保育園・幼稚園	1	1	1	29
6 一時保育・一時預かり	0	0	1	5
7 親と子のつどいの広場	41	25	38	125
8 子育てサロン	3	0	0	5
9 子育て支援者会場	0	0	0	11
10 地域活動グループ	1	1	0	3
11 その他の居場所	1	0	0	10
12 医療機関	0	0	0	2
13 相談機関	0	1	0	0
14 他区拠点パートナー	8	4	3	36
15 他区 区役所	0	0	0	1
計	157	132	140	541

1 拠点における事業周知、アウトリーチによる周知

- ①気軽に相談できるように「パートナーと話そう」をひろばで月1回開催。手遊びや絵本の読み聞かせの後、子育てパートナーについて説明し個別に話す機会を設けた。
- ②母子手帳交付やプレパパ・プレママDAY、赤ちゃん教室、こんにちは赤ちゃん訪問員の定例会、区民祭り、区役所他課イベント、ホームページやイオン掲示板での周知の他、コロナで中止になっていた乳幼児健診会場での周知を再開し、拠点にまだ来たことがない方に向けてアプローチしている。
- ③親と子のつどいの広場に定期的に出張相談に出向き、相談内容に応じて情報提供することが出来た。また主任児童委員会や子育て支援者の定例会に参加し、利用者支援事業について伝えた。

2 主体性を尊重した個別相談

- ①相談者に寄り添い、傾聴し、主訴を聞き取り、ニーズに合った対応を心掛けた。情報ファイルの定期的な更新を行い、最新の情報を提供できるよう努めた。ひとり親で面会交流の場として拠点を利用する方の相談など、養育者自身の相談にも個別に対応した。
- ②区と定期的に、また必要に応じてカンファレンスを行い、対応の振り返りや検討する場をもち、個別相談に活かした。
- ③スタッフ会等活用し、子育てパートナーに引き継ぐ相談について話し合う機会を持っている。
- ④拠点を卒業した小学生の親からの相談もあり、相談機関を紹介するなど情報提供している。

3 ネットワークの強化

- ①子育てサロン訪問時には虐待予防の啓発を行っている。また、発達に不安を持つ方を支援するネットワークのきらきら連絡会では、より効果的な支援方法について検討し取組を考えている。
- ②イオンとの包括連携協定のもと、天王町店において令和5年5月より月1回、出張相談を開始し、買い物のついでに気軽に相談できるよう努めた。
- ③ほどがやこどもニコニコフェスタ、外遊び(保育園協力)、子育て支援連絡会等において、子育てパートナーを周知し、拠点が気軽に相談できる場であることを伝えた。
- ④貧困、ひとり親、外国人支援など多様な相談等においては、区社会福祉協議会、ひとり親サポートよこはま、国際交流ラウンジ等との連携を継続している。
- ⑤保土ヶ谷区の地形の特徴として、近隣区からの相談があるので、他区と連携して対応している。

評価の理由(区)

- ①サテライト開設に合わせて、広報よこはまで拠点における相談事業について周知した。母子手帳交付時、こんにちは赤ちゃん訪問時、4か月健診時に子育てパートナー周知チラシを配布。コロナ感染拡大予防のため、4か月健診時の子育てパートナーが直接周知する機会を中止していたが、令和5年6月から再開した。また、区民祭りや区他課イベントでも周知チラシを配布できるよう調整した。区他課や子育て関連施設に拠点について周知を行ったことで、拠点へ直接情報が届くようになっている。令和5年度は区連会を通じて周知できるよう調整していく。
- ②新任子育てパートナーに対して、区の事業を知ってもらう研修を実施した。区・拠点定例会で、子育てパートナーより相談内容について共有を受けた事例に対し、対応について役割分担を行ったり、助言を行ったりしている。緊急を有する内容に関しては、直接地区担当保健師にタイムリーに報告するよう、情報の取り扱い方法については、日ごろより確認している。
- ③赤ちゃん教室や地域の会議等に出向いて、子育てパートナー事業を直接周知できるよう調整を行った。また、ほどがやこどもニコニコフェスタや子育て支援連絡会等のネットワークを通じて、子育てパートナー事業を周知できるよう共に取り組んでいる。

拠点事業としての成果と課題

(成果)

- ①拠点内で「パートナーと話そう」という取組を開始し周知に努めた。相談件数については、令和4年度は前年度と比較し倍増している。引継ぎノートの活用やミーティングでの共有を通し、スタッフの利用者支援に繋ぐ意識が向上したことも、相談件数が増加した一因と考えられる。
- ②親と子のつどいの広場への出張相談が定着し、支援が必要と思われる親子について連絡してもらうなど、虐待予防に努めることが出来た。新たにイオンやこっころサテライトでの相談も開始している。

(課題)

- ①「令和5年こっころに関するアンケート」では子育てパートナーを知らないと答えた方が58.0%、相談したことがある方は24.1%であった。拠点を利用していない層に対して、商業施設や乳幼児健診会場での周知を再開したが、引き続き産前からの周知が必要である。産院やレディースクリニック等との新たなつながりを検討していく。
- ②コロナ禍で子育てサロンへの定期訪問が出来なかった。今後は訪問可能な子育てサロンから訪問し、支援が必要と思われる親子については子育てサロンから拠点・区に繋いでもらうよう依頼し、虐待予防に努める。
- ③産前産後の相談については、更に区の助産師、母子保健コーディネーターと課題を共有していくことが大切である。

振り返りの視点

- ア 利用者支援事業を幅広く区民や関係機関に周知しているか。
- イ 養育者に対して、気軽に相談しやすい仕組みづくりや工夫をしているか。
- ウ 最新の情報を収集し、活用できるよう工夫しているか。
- エ 相談に対しては、傾聴に努め、ニーズを把握して対応しているか。
- オ 拠点内でパートナーの役割を理解し、日頃から相談者を拠点内でつなぎ合うことについて、お互いの役割分担を明確にしたうえで、相談対応・利用支援を行っているか。相談者の相談内容に応じて継続対応やつなぐ必要性を判断し、対応しているか。
- カ 専門的な対応を要する相談に対して、相談内容と相談者のニーズを踏まえ、速やかに関係機関への紹介・仲介・支援依頼を行うなど、適切な対応をとっているか。
- キ 拠点内連携、関係機関への紹介・仲介後も必要に応じて役割分担を確認しながら、フォローをしているか。
- ク 相談の対応状況や支援の適切さ、拠点内外での連携状況等について、多角的な視点で振り返りや検討を行っているか。
- ケ 利用者支援事業の周知や個別相談等の取組を通じて、支援につながる新たなネットワークの構築を行っているか。
- コ 拠点のネットワークを活用し、関係機関や地域の社会資源との関係づくり・関係強化を行っているか。
- サ 把握した課題を関係機関等と共有し、拠点事業の充実、必要な支援の調整や見直し、不足する資源の調整、提案や新たな創出につなげているか。